

『物語百番歌合』の詞書と 『風葉和歌集』の詞書について

——『狭衣物語』を中心に——

小栗 伸子

一

『狭衣物語』は、『源氏物語』と並び称せられた作品である。このことは、『無名草子』の「狭衣こそ源氏につきてはよ（う）覚え侍れ」という文章からも察せられよう。さらに、『明月記』の貞永二年三月二十日の条には、「歌に於ては拔群」とあるから、物語中の和歌も藤原定家から高い評価を得ていたことが知られる。

『狭衣』の和歌は、藤原定家撰『物語二百番歌合』の中の『百番歌合』（『源氏狭衣歌合』ともいう）に『源氏』の歌と組み合わせて百首、『風葉和歌集』に五六首と、多数を選出されている。歌合と撰集というように両集の形態に

はかなりの相違があり、問題は残るが、『狭衣』の和歌への評価について考えてみたい。本稿では、両集に共通する四一首（注）の詞書を中心に見ていくことにする。なお、『風葉和歌集』は、卷十九、二十の二巻が散逸しているので、四一首というのは、現存する『風葉和歌集』での和歌の共通数である。又、物語本文は、新潮日本古典集成『狭衣物語上下』に、『物語百番歌合』、『風葉和歌集』は、共に岩波文庫『王朝物語秀歌選上下』に拠るものとする。

二

ここでいう詞書とは、『狭衣』に依拠してはいるが、物語本文そのものではない。物語中の和歌は、それぞれの場

面で詠出されてこそ、真価を発揮するのだと思う。詞書は、その印象深い場面を再現し、和歌の持つ効果を最大に引き出すために撰者が創意工夫したものだからである。

この、物語性を担う詞書を考えていく上で、物語の登場人物の名前を注視したい。(厳密には、「物語における個人を識別しうる名称」であるが、これを含むものとする。) 物語における人物名の役割は、たいそう大きいと思うからである。

ところが、物語本文に「人物名」を見出すことはほとんどない。主語は省略されるのが普通だからである。現に、両集の詞書の中で、物語本文に記載されている「人物名」がそのまま使われている例はない。なぜなら、両集では、物語和歌の作者名を、物語における最終的な地位や名称で表記することが多いからである。

(1) 一条院の姫宮の御気配も、ほのかなりしかばにや、なべてならぬ心地せしを、「いかで御かたちなどのよう見たてまつらむ」など心にかかりたまひて、(略)

思ひつつ岩垣沼のあやめ草みごもりながら朽ち果て
ねとや (巻一 へ上二四頁)

の歌が、『百首歌合』、『風葉和歌集』では、

二位中将ときこえし時、五月五日、女のもとに

一品宮に

遣はさせ給ひける

思ひつつ岩垣沼のあやめ
草みごもりながら朽ちや
果てなむ

『百首歌合』二〇番右

狭衣のみかどの御歌
思ひつつ岩垣沼のあやめ
草みごもりながら朽ち果
てねとや

『風葉和歌集』一〇七四
番

として掲載される。(以後、上段に『百首歌合』、下段に『風葉和歌集』を配する。)『百首歌合』の「一品宮」とは、「一条院の姫宮」のことである。なお、和歌の校異については、言及しないものとする。

右に掲げた歌以外で、詞書中の人物名が、物語本文の実際の記載に拠っているものはない。よって、他の詞書中に見られる人物名は、それぞれの撰者が、物語に従って補ったものである。

『百首歌合』……二四例

『風葉和歌集』……十例

これは、両集の詞書中に補われている人物名の数である。数にかなりの差があることがわかる。これは、『百首歌合』の詞書が、人物名などを明記して、歌の詠作事情を簡潔に示そうとするのに対し、『風葉和歌集』の詞書は、物語の本文に忠実であることが多いためだと思われる。

次に詞書中の人物名の効果について、実際に見ていくことにする。

- (2) 日数の過ぐるままにも、有明の月影は面影に恋しくて、忍び歩きもことにしたまはず。さすがにあやしうおぼさすれば、

片敷に重ねぬ衣うち返し思へば何を恋ふる心ぞ

(巻四 へ下二六三頁)

中宮にきこえそめさせ
給へりしころ

片敷きに重ねし衣うち返
し思へば何を恋ふる心ぞ

(九六番右)

- (3) つとめては、いと疾く嵯峨の院に人奉りたまふ。(略)

命さへ尽きせずものを思ふかなわかれしほどに絶え
も果てなで (巻三 へ下二六九頁)

女二宮に

命さへ尽きせずものを思
ふかな別れしほどに絶え
も果てなで

(四四番右)

つれなくのみ見えたて
まつりける女のもとに
近づき寄せ給へるに、
御答へも聞こえざりけ
れば、大方の世をも限
りにおぼしめし閉ぢめ
させ給ひて、あしたに
遣はさせ給ひける

狭衣のみかどの御歌

命さへ尽きせず物を思ふ
かな別れしほどに絶えも
はてなで

(九六三番)

女をうち解けぬさまに
て明かさせ給ひける後、
恋しうおぼし出でられ
て、夜の衣を返しわび
させ給ふ夜な夜なも、
さすがにあやしうおぼ
されければ
狭衣のみかどの御歌
片敷きに重ねぬ衣うち返
し思へば何を恋ふる心ぞ

(七八八番)

(2)、(3)共に、『風葉和歌集』の詞書の方が詳細に詠作状況を説明していることがわかる。特に(3)の歌について見てみると、物語場面を要約し、狭衣の心情をも盛り込んだ『風葉和歌集』の詞書に較べて、『百首歌合』の詞書は、不親切この上もない。

ところが、どちらの詞書が印象が強いのか、というと『百首歌合』の方だと言わなくてはならない。それは、『百

「歌合」の詞書に見られる「人物名」の効力であろう。

物語を知る者は、(2)の「中宮」に、狭衣がどれ程深く恋い慕っても、終に結ばれることのなかった源氏宮の面影を持つ姫君（源氏）の、藤壺中宮に対する紫の上的役割を演じる女性）を重ねることができ。さらに(3)の「女二宮」には、両親の帝や皇后からこよなく愛された、世にも美しい姫君でありながら、狭衣との御子を出産した後、落飾された悲運の皇女を思い浮かべることができよう。

物語を読む時、登場人物に何らかの感情を抱かない人はいないのではないだろうか。詞書中に人物名を見出すということは、物語に対して抱いている感情を思い起こすことである。よって、「中宮」や「女二宮」には、共鳴するものがあるとしても、『風葉和歌集』の詞書中に見られるような「女」に感情移入することはできないのである。

『風葉和歌集』の詞書の印象の薄さは、ドラマ性を背負った「人物名」（固有名詞）に対する「女」（普通名詞）の影響力の弱さに起因すると言えよう。

『風葉和歌集』の撰者は、なぜ「中宮」や「女二宮」ではなく、「女」と記したのだろうか。『百番歌合』の詞書には、個人を特定できない普通名詞（女、みかど等）が補われている例はないのである。

これは、『風葉和歌集』の撰者が、詞書をおろそかにし

ていたことを意味しているのではない。むしろ、物語本文に、より忠実だったために、こういう結果となったと見るべきではないだろうか。

物語本文の言葉が、詞書中に使われている例を見ていくことにする。

(4) 「ひまなくうち重ねても、心よりほかに隔つる夜な夜なのわりなきを、さは思ひたまふや。（略）」など、尽きせず語らひたまひて

あひみては袖濡れそむるさ夜衣一夜ばかりも隔てず
もがな（巻一（上九五頁））

飛鳥井の宿りにて
あひ見ては袖ぬれまさる
さ夜衣一夜ばかりも隔てず
もがな
忍びたる女に御心より
ほかに隔つる夜な夜な
のわりなきなどのたま
はせてよませ給ひける
狭衣のみかどの御歌
あひ見ては袖ぬれまさる
さ夜衣一夜ばかりも隔て
ずもがな

（二五番右）

（八六三番）

(5) 忍びあへざりしあはれば、さらに忘れたまはず。（略）

底の藻屑まで尋ねまほしき御心絶えざるべし。

思ひやる心ぞいとど迷ひぬる海山とだに知らぬ別れ

に (巻二へ上一五七頁)

飛鳥井ゆくへなくなり

て後

思ひやる心いづくに逢ひ
ぬらむ海山とだに知らぬ

別れに

(六四番右)

飛鳥井のこと、さらに

思ひ忘れず、底の藻屑

まで尋ねまほしうおほ

されければ

狭衣のみかどの御歌

思ひやる心いづくに逢ひ

ぬらむ海山とだに知らぬ

別れに

(一〇二五番)

以上のように物語本文の言葉をほぼそのまま引用してい

る例は、

『百首歌合』……………五例

『風葉和歌集』……………三三例

となつており、『風葉和歌集』の調書が、いかに丁寧に物
語本文を取り込んでいるかがわかる。

さらに、このことを裏付ける例として、

(6) 尾花がもとの思ひ草は、なほすがとおほさるるを、
むげに霜に埋もれ果てぬるは、いと心細く、おほし侘
びて、

尋ぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露

(巻二へ上一二七頁)

一品の宮、人しれぬさ

まにおはしましけるを、

ゆくへおほつかなくお

ほしめし悩みけるころ、

尾花がもとの思ひ草の、

霜深くなりゆくを御覽

じて

尋ぬべき草の原さへ霜枯

れて誰に問はまし道芝の

露

(三番右)

女の行方おほつかなく

おもほし悩み給ひける

ころ、尾花がもとの草

も霜深くなりゆくを御

覽じて

狭衣のみかどの御歌

尋ぬべき草の原さへ霜枯

れて誰に問はまし道芝の

露

(三八五番)

右の歌を見てみると、一線部分は、明らかに物語本文に拠
つていと思われるのに、『百首歌合』の詞書中の「一品宮」
は、「飛鳥井」の間違いなのである。狭衣と飛鳥井との間
に誕生した姫は、長じて後「一品宮」と称されることにな
るので、定家は、二人を混同したのであろうか。『風葉和
歌集』の詞書中には、このような間違いは見られない。『風
葉和歌集』の撰者の方が、物語を深く読み込んでいたから
であろう。

又、(6)の『風葉和歌集』の詞書からは、『百首歌合』の
影響を感じるが、このような例はいくつかある。

(7) 「今まで出でさせたまはずとて、おほつかながらせた

まへる」とてあげたれば、蚊遣火さへ煙りてわりなげなり。

我が心かねてや空にみちぬらむ行くかた知らぬ宿の

蚊遣火 (巻一 へ上六二頁)

飛鳥井のやどりに御車
引き入れ給へるに、蚊遣火の煙所せければ

我が心かねて空にや満ち

ぬらむ行く方知らぬ宿の

蚊遣火

(一一番右)

火さへ煙りてわりなげれば

狭衣のみかどの御歌

我が心かねて空にや満ち

ぬらんゆくへも知らぬ宿

の蚊遣火

(一九三番)

(8) 「渡る舟人かちを絶え」など、かへすがへす書かれたるは、「その折は、我と知りて書きたまへるにはあらじなれど、ただ今わが見つけたるは、ことしもこそあれ」と、(略)

かちを絶え命も絶ゆと知らせばや涙の海にしづむ舟

人 (巻一 へ上一一頁)

心よりほかなる舟のうちにて、身を限りに思ひなりけるに、「渡る舟

人棍を絶え」と書かせ給へりける御扇に書き添へける

飛鳥井

棍を絶え命も絶ゆと知らせばや涙の海に沈む舟人

人 (三四番右)

「渡る舟人」と書かせ給へる扇に書き付けらる

飛鳥井

棍を絶え命も絶ゆと知らせばや涙の海に沈む舟人

(二〇四五番)

以上の『風葉和歌集』の―線部分は、物語本文から引かれた可能性が高いが、線部分の相似は、『百番歌合』の影響と見てよいと思う。

四

樋口芳麻呂先生が、「源氏物語歌合」について、「文学」五七卷八号で、「物語歌に詞書を付することは容易でない」例をいくつか挙げられ、その中で物語の「歌の直前の記述に密着した詞書」が危険である場合の例も取り上げておられるが、『風葉和歌集』の撰者も、詞書を付けるのに、さぞ苦労したことであろう。物語本文の言葉を使った、効果的な詞書を作るのは、決して易しいことではない。にもかかわらず、物語本文に即した詞書を考え、『百番歌合』を

参考にするなど、『風葉和歌集』の撰者は、詞書を作ることに、熱心だったに違いない。

ここで、樋口先生の「風葉和歌集序文考」(『国語と国文学』四二巻一・二号)の説に従って考えを進めていきたい。

『風葉和歌集』を実際に撰集したのは、大宮院(西園寺定子)の女房たちである。この作業の中心的存在であった京極為子は、『風葉和歌集』の精撰を行った撰者である為家の孫である。曾祖父定家の業績を、為子が意識していたのか、為家が助言したのか、いずれにせよ、比較的容易に『百番歌合』を見ることができる立場にいたと思われる。

『狭衣物語』の和歌の選出を、為子が担当したと断言することはできないが、指導的役割を担ったであろうから、他の女房の選出作業の相談に乗ることもあっただろう。その際、『百番歌合』を参考にするよう、薦めた可能性は充分あるのではないか。

以上のように考えていくと、『百番歌合』を参考にしたにも関わらず、なぜ『風葉和歌集』の撰者は、詞書中の「人物名」を、明確にしない例を作ったのか、疑問が残る。

ここで、詞書中の登場人物名について振り返ってみたい。登場人物は、物語の柱である。物語に対して抱く感動は、登場人物に負うところが大きい。「人物名」は、その役割を担っているのである。『風葉和歌集』の撰者が、詞書中

の「人物名」をどのように考えていたのか、見ていくことにする。

以下は、『百番歌合』と『風葉和歌集』の詞書中の、同一人物の名称の表記を比較したものである。

『百番歌合』	『風葉和歌集』
○ 二位中将(十番右・二十番右)	○ みかど(一六〇番・九七二番・一〇四五番・一一二九番)
○ 大将(二番右・二三番右・七三番右)	○ 齋院(四八〇番・八〇五番・一〇六五番)
○ 源氏の宮(一六番右・一九番右・三二番右・四二番右・九七番右)	○ 齋院(四三三番)
○ 飛鳥井・飛鳥井の君(一一番右・二五番右・五四番右・六三番右・六四番右・六六番右・九〇番右)	○ 女(三八五番・八六三番)
○ 女二の宮(二番右・三八番右・四四番右・七〇番右・七三番右)	○ 女(九六三番)
	○ 女二の宮(二二六番・三九六番)

	○ 入道の宮 (七五番右)	○ 女二のみこ (九二三番)
	○ 一品の宮 (三番右・二三番右・七三番右)	○ 嵯峨院の女二のみこ (八五〇番)
	○ 中宮 (二三番右・九六番右)	○ 女 (二〇七四番)
		○ 一条院の一品の宮 (二二六番)
備考	『百首歌合』 四二番右・九七番右は、「齋院、源氏の宮」ときこえし時」というように、「源氏の宮」と「齋院」の両方の呼称が記されているので、傍線を付しておいた。	
		○ 女 (七八八番・八三六番)

- 『百首歌合』に比べて『風葉和歌集』の詞書中の人物表記が不統一であることが右の表からもわかる。特に、飛鳥井から源氏の宮・女二の宮、中宮、一品宮と、身分の上下に関係なく「女」と表記されている例が目を引く。そこで、「女」と表記する必然性について考えてみると、
- (ア) もともと物語本文には人物名がほとんど書かれていないので、名前を補うことはしなかった。
- (イ) 詞書中で、物語場面を説明することに力を入れなかった。
- (ウ) 大宮院の女房たちは、物語にとでも精通していたので、女房たちの間では、名前を出さなくても通用し

た。

などが挙げられると思う。

まず、(ア)について見てみる。これが一番有力かと思われるが、実際に人物名を補っている例があるので納得できない。もっとも、『風葉和歌集』の和歌には、一首毎に歌の作者名が付されているので、詞書中に人物名が無くても、ある程度は、分かるだろうと思つたのかもしれない。しかし、不統一な人物表記という点も併せて考えると、充分な説明とは言えない。

次の、(イ)だが、物語本文の言葉そのまま詞書に引用している例が、『百首歌合』に比べて遙かに多く、これも考えられない。

最後の(ウ)については、『風葉和歌集』の成立状況から見ていくことにする。

『風葉和歌集』は、

国母という女性至高の地位にある大宮院が命令を下し、和歌の蔭に隠れて全く無視されている物語歌を世に出したいという熱意に燃えて作られた最初の物語歌

撰集 (『風葉和歌集序文考』)

である。しかも、二〇〇からの物語の歌を抜くという、気の遠くなるような大作業を経て編まれた、公的ともいえる性格を持つ撰集である。女房たちの間でだけ通用するよう

な、人物表記を、『風葉和歌集』の中で使ったとは、思われない。

ここでもう一度、「人物名」の効果について考えてみたい。「女」等の、個人を特定しない名称は、帰属する物語を持たない。しかし、物語をくわしく知らない者にとつては、その背景である物語世界が前面に出ない方が、和歌に親しみ易いのも事実である。『風葉和歌集』が、選入しているのは、二〇〇余の物語である。全ての物語が流布していたとは考えにくい。ほとんど知られていない物語の登場人物名を出しても、記号の羅列に過ぎないであろう。このような配慮があつて、「人物名」は伏せられたのかもしれない。

ところが、右の説明には、いくつか問題が残る。一つは、ほとんど知られていないような物語の登場人物名が、詞書に書かれている例が見られるからである。

(a) 登花殿の女御まかり出でて侍りけるにたまはせける

花宰相のみかどの御歌

夏の夜の夢の直路に行き迷ひ出でし有明のかけぞ恋しき(一〇七九番)

(b) 梢に変はる女院、初めてうち解けたるさまに御覽せられ給へりけるあした、む月のついたちなりければ聞こえさせ給ひける

初音の高陽院の御歌

きのふまで下は結びし池水に今朝は千年のかけぞのどけき(一一五五番)

もう一つは、いくら二〇〇余もの物語の和歌を取つているとはいえ、『狭衣』ほどの名の通つていたのであろう物語の人物名を伏せる必要があつたのかという点である。

これらの問題点を考慮する上で、前述した、(2)の歌の前後を見ていきたいと思う。

(c) 大納言のすけ、うち解けたてまつらぬさまに侍りければ、のたまはせける

御垣が原のみかどの御歌

我ならぬ人にも疎くならずは重ねてなかの袖も恨めし(七七七番)

(d) (2) 女をうち解けぬさまにて明かさせ給ひける後、恋しうおぼし出でられて、夜の衣を返しわびさせ給ふ夜な夜なも、さすがにあやしうおぼれされければ

狭衣のみかどの御歌

片敷きに重ねぬ衣うち返し思へば何を恋ふる心ぞ(七八八番)

(e) 中宮、宇治におはしましけるころ、聞こえさせ給ひける

よその思ひのみかどの御歌

片敷きの袖は我のみ朽ち果ててつれなさまざる宇治の

橘姫（七八九番）

(d)の詞書中の「うち解けぬさま」は、(c)の詞書中の「うち解けたてまつらぬさま」を受けているように見える。さらに、両歌に、(袖、衣を)重ねるといふ、共通した表現を見出すことができる。また、(d)の歌にある「片敷」という単語から、同じ語をもつ(e)の歌が連想されたとも考えられよう。その上、この三首は、恋しい女性に贈られた、みかどの歌なのである。

このような、和歌の表現や、物語の場面から歌を連想し、組合せを考える、という方法は定家が、『百首歌合』ですで行っていたことである、『風葉和歌集』の撰者が、これに見倣ったということは考えられると思う。

ところが、『風葉和歌集』には、『百首歌合』の真似をできないところがある。それが詞書である。『狭衣物語』は、非常に強く『源氏物語』の影響を受けた作品で、物語の場面から、登場人物に至るまで、『源氏』に対応できることが多い。それ故に、詞書中の人物名を明確にし、和歌はもとより、歌が詠まれた物語の状況をも対応させ、組合せの面白さを目指している面がある。しかし、二〇〇余の物語から歌を選出している『風葉和歌集』には、そのような詞書を作ることなど、できない相談である。

実際、(d)の詞書の「女」は、後の藤壺中宮である。(c)の

「大納言のすけ」がどのような女性なのかは、明確でないが、恐らく大納言家の姫君で、典侍として宮中に出仕していた人物ではなからうか。いずれにせよ、式部卿宮の姫君で、後に中宮となられた女性ほどには、身分が高くなかったであろう。反対に、(e)の「中宮」は(d)の「女」は、実は「中宮」なのであるから）問題なく同等の身分であるといえよう。

では、なぜ(d)の詞書には、「中宮」ではなく、「女」と書かれたのであろうか。この点について、『百首歌合』の詞書がどのように記されていたかを見ると、「中宮にきこえさせ給へりしころ」とある。しかし「片敷きに」の歌の詠まれた当時は、式部卿宮の姫君で、まだ中宮に昇ってはいないのである。「中宮をうち解けぬさまにて……」と書くことに抵抗をおぼえて、「女」としたのではなからうか。『百首歌合』が「中宮にしのびておはしましそめて、あしたに」の詞書を付している十三番右の

おもかけは身をぞはなれぬうちとけて寝ぬ夜の夢は見るとなけれど

の歌も、『風葉和歌集』の詞書では、

同じさまにて明かせ給へる女のもとに遣はさせ給ひける（八三六番）

とあるのである。そして右の(c)(e)の詞書中の人物名も、

(c)大納言のすけ、(d)女(後の中宮)、(e)中宮となつて、なめらかな配列になつてゐることがわかる。

次に女二の宮について、『風葉和歌集』が詞書で「女」と記している八六三番(三の(3)に掲げた)を見ると、歌の詠出時、女二の宮は、出家しており(入道の宮となられてゐる)、「つれなくのみ見えたてまつりける入道の宮のもとに近づき寄らせ給へるに」とは、詞書に書きづらかつたのではなからうか、と思われる。

齋院(＝源氏の宮)も、『風葉和歌集』八〇六番の詞書では、「おぼすことをいささかもらさせ給ひつる女に」とあるが、源氏の宮が齋院になる以前の歌であり、「齋院に」と書くことには、憚りがあつたのではないだろうか。『風葉和歌集』四三五番の詞書に「参るべきよし聞こえける人に……」とあるのは、四三六番(詞書は「御返し」)の作者名に「齋院」と記されているのだから、齋院になる以前のこの贈答歌では、詞書に「人」と記す方が穏当かもしれないのである。

このようにみてくると、『風葉和歌集』の詞書で「女」と書くことにも、それなりの理由がある場合が少なくないようにも考えられるのである。

(注1) 百番歌合二番右(風葉和歌集八五〇)・三番右(三八

五)・六番右(二七六)・十番右(二六〇)・十一番右(一九三)・十三番右(八三六)・十五番右(二二七)・十六番右(一〇六五)・十九番右(一〇八四)・二十番右(一〇七四)・二三番右(九八九)・二五番右(八六三)・二八番右(四三六)・三二番右(二二八)・三三番右(八〇五)・三四番右(一〇四五)・三七番右(一一二九)・三八番右(九一三)・四二番右(八〇六)・四四番右(九六三)・四八番右(九七二)・五〇番右(一〇四九)・五四番右(三四九)・五五番右(一五二)・六三番右(一一二〇)・六四番右(一〇二五)・六六番右(一一三〇)・六八番右(一〇三四)・七〇番右(三七五)・七三番右(二二六)・七五番右(一二六六)・七六番右(三九六)・七七番右(二三八七)・七八番右(四〇八)・八八番右(四八〇)・八九番右(二二四〇)・九〇番右(二〇五〇)・九一番右(一〇四六)・九六番右(七八八)・九七番右(四三五)・九八番右(一四六)

(大学院博士前期課程一年)